

氏名	本多 正敏				
学位の種類	博士（言語学）				
学位記番号	博 甲 第 8904 号				
学位授与年月日	平成 31年 3月 25日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当				
審査研究科	人文社会科学研究科				
学位論文題目	A Cartographic Approach to Focus-Related Linguistic Phenomena (焦点関連現象へのカートグラフィーに基づくアプローチ)				
主査	筑波大学	教授	博士（言語学）	加賀 信 広	
副査	筑波大学	教授	文学博士	廣瀬 幸 生	
副査	筑波大学	准教授	博士（言語学）	島田 雅 晴	
副査	筑波大学	准教授	博士（言語学）	和田 尚 明	
副査	神田外語大学	教授	Ph. D.（言語学）	長谷川 信 子	

論 文 の 要 旨

本論文は、生成文法理論におけるカートグラフィーの枠組みに基づき、文中に焦点を表示する統語位置を複数認める重層性の観点から、焦点が関わる言語現象を考察したものである。

焦点は、文が表す情報構造と関わる概念の1つであり、文中の新情報を担う要素とされる。焦点については、統語・意味・音韻のインターフェイスの観点から、どのようなタイプの焦点がどのような文法形式を通して表現されるかという問題が、様々な言語を通して広く考察されてきた。焦点タイプの分類は多岐に渡るが、重要な分類の一つとして、相手が持つ誤った情報を訂正する対比焦点（Contrastive Focus: CFoc）と疑問文に対する回答などで具現する、相手に新情報を提示する情報焦点（Information Focus: IFoc）の区分が挙げられる。これら2つの内、文の左端周辺部（CP）への移動との関連で盛んに研究されてきたのは、対比焦点であった（例：BILL Mary met, not John）。一方の情報焦点の方は、移動現象との関わりで捉えた研究はあまりなかったが、Cruschina (2011) は、シチリア語やサルディニア語等のイタリア語の方言において非対比的焦点移動現象が観察されることを指摘し、CP内に対比焦点を表すCFocに加え、情報提示機能を担うIFocの統語位置も認めるべきであると提案した。この提案は、焦点位置を2つ想定しているため、焦点の重層性を認める立場といえる。

本論文は、英語を主な対象言語として、Cruschina (2011) が提案する焦点の重層性仮説の検証を行うことを主眼とする。この仮説の下、CFoc と IFoc への移動とみなされる英語のそれぞれの現象は、異なる文法的特性・音韻的特性・語用論的特性を示すことが論じられる。また、本論文では、Cruschina の考察にはなかった次の2点についても考察が行われる。i) IFoc への移動に伴うとされる話し手の評価の含意（意外性や驚きなど）を文法的に導く可能性を探る。ii) 焦点の重層性仮説を名詞句の情報構造にも応用し、さら

なる証拠を得る。

第1章の序章は、本論文に関わる研究の背景および目的を述べている。

第2章は、本論文で採用するカートグラフィーの枠組みと Cruschina (2011) の焦点の重層性仮説を導入し、CFoc と IFoc の焦点階層への移動によって生じる文法的特性・音韻的特性・語用論的特性をまとめる。その際、生成文法理論においてこれまで議論されてきた諸概念がどのように整理されるかについても論じている。たとえば、Pesetsky (1987) の談話連結 (D-linking) の概念に関して、先行文脈の情報との結びつきを表す *wh* 句は CFoc へ移動し、他方、先行文脈との結びつきがない *wh* 句は IFoc へ移動するなどの仮定が採用される。Cruschina は、IFoc 要素が担う話し手の評価に関わる意味 (意外性や驚き) は、文法的に保障されるものではなく、IFoc 要素が表す新情報が話し手や聞き手が持つ知識と結びつくことで生じる含意であると述べているが、この立場に対して、本論文では、IFoc への移動によって表される話し手の評価を、評価形態論を踏まえながら、文法的に導く可能性を検討する。評価形態論と分散形態論 (Distributed Morphology) を組み合わせ、CP 領域に話し手の評価を表す階層と IFoc が組み合わさった文法範疇が存在すると想定することで、IFoc fronting によって生じる話し手の評価の意味を文法的に導く可能性を提示している。

第3章では、第2章で提示した枠組みに基づき、IFoc fronting が関わる文法現象として、不変化詞倒置文 (例: *Up went the balloon.*) および否定倒置文 (例: *Never has John lied.*) を取り上げ、考察を行っている。不変化詞倒置文に関しては、ドイツ語において観察される不変化詞倒置現象 (V2 現象の一種) に関する研究の知見を応用し、当該現象は非対比的な焦点移動により派生されると論じる。具体的には、不変化詞の文頭への移動により、動詞句が表す程度性が非対比的に強調されると主張する。また、否定倒置文に関しては、Haegeman (2000) 以降、焦点移動に関わる言語現象とされてきたが、本論文では、ロマンス諸語において観察される数量詞前置に関わる研究の知見を応用し、英語の否定倒置文は非対比的な焦点特性を示すことを主張する。具体的には、文頭への否定要素の移動により、文の否定極性が非対比的に強調されると論ずる。いずれの焦点現象も、対比焦点移動とは異なり、移動要素と命題内容全体で一つの情報単位を成すため、文焦点の文脈 (たとえば、“*Guess what?*” への回答) と整合するという共通特性を持ち、この特性が IFoc fronting を想定した分析から導かれることを示している。

第4章では、焦点の重層性仮説を名詞句に適用し、さらなる検証を行っている。生成文法理論においては、文と名詞句は、主語や目的語等の文法機能や受け身のような移動操作が適用する点で平行性があることが論じられてきている。さらに、近年のカートグラフィー研究の発展に伴い、文と名詞句の平行性を探求する試みは、情報構造にも拡張されてきている。この研究指針に基づいて、焦点の重層性仮説を名詞句に適用した場合、文の左端領域と同様に、名詞句の左端領域にも IFoc の文法範疇が存在することになる。本章では、二重名詞語 (binominal) 名詞句 (例: *That idiot of a man!*) や指示詞を伴う二重属格名詞句 (例: *That nose of his!*)、否定倒置名詞句 (例: *not very good (of) a student*) などの現象が名詞句内の IFoc fronting の事例であると主張する。

第5章では、英語の感嘆文を取り上げ (例: *What a beautiful girl John met!*)、当該現象が CFoc fronting によって派生されることを論じる。感嘆文は、*wh* 感嘆句内の形容詞表現の程度の極度性に対する話し手の驚きを表す言語現象として、生成文法初期から研究が進められ、Grimshaw (1974) 以降は感嘆文の命題内容は前提になっていると想定されている。このような先行研究の知見を踏まえ、感嘆文が文焦点を要求する文脈で用いられないことなどを示しながら、当該現象を CFoc fronting とする妥当性を論じている。

第6章は結論であり、本研究のまとめと残された課題について述べられる。

審査の要旨

1 批評

本論文は、生成文法のカートグラフィーを枠組みとして、焦点に関わる現象を理論的に深く掘り下げて考察したものである。Cruschina (2011) のイタリア方言に関する研究に注目し、CP 領域には対比的焦点要素の位置に加え、非対比的情報焦点要素が移動する位置も存在するという仮定を受け入れ、それを英語に適用することで、英語の焦点関連構文を原理的に分類するための妥当な基準を示したといえる。英語には1種類の焦点話題化構文 (Focus Topicalization) しか存在しないために、従来は焦点位置が1つしか存在しないと考えられていたが、本論文では英語においても対比焦点と情報焦点の2つが区別されることが主張されている。すなわち、焦点話題化構文や **wh** 感嘆文は対比焦点前置を含む移動操作であるのに対して、**wh** 疑問文や否定倒置文、不変化詞倒置文などは情報焦点前置を含む移動操作であることが述べられ、そのような分類を行うことで、それぞれの文が担う情報構造的意味が自然な形で導かれ、さらに主語・助動詞倒置操作適用の有無についても説明できることになっている。焦点に関わる英語の構文がこのような形で原理的に整理できたことは、焦点研究にとって大きな貢献をなすものと考えられ、高く評価できる。

本論文では、焦点の重層性仮説が名詞句にも拡張され、名詞句内においても情報焦点移動とみなしうる現象が存在することが論じられている。従来の研究では、名詞句内での対比焦点移動の事例が指摘されることはあっても、情報焦点移動が名詞句でも起こるという議論は存在していなかった。本論文において、新たに二重属格名詞句や否定倒置名詞句などが情報焦点移動の事例であるという指摘が行われたことは、名詞句の情報構造に関わる研究にとって、大きな意義をもつといえる。

本論文において、著者は丹念なインフォーマントチェック作業を実施している。たとえば否定倒置名詞句に関して、前置された形容詞 (たとえば、**good**) は、通常の論理的否定の解釈 (**not good**) ではなく、対極否定の解釈 (**bad**) になることを母語話者の調査から明らかにしている。他にも“**Guess what?**”への回答として可能な構文とそうでない構文を母語話者に判定してもらうなど、焦点研究にとって貴重な言語事実となる多くの観察を得ている。これらの事実観察も本論文の評価すべき点の1つである。

ただし、残された問題がないわけではない。不変化詞倒置文では、助動詞ではなく、動詞が主語と倒置するが、それはなぜか、**wh** 疑問文や否定倒置文は情報提示文として、不変化詞倒置文と同様に、単純判断 (**thetic judgement**) を表すと特徴付けられるが、両者は明らかに文タイプが異なっている、などの問題がある。さらに、ロマンス系の言語とゲルマン系の言語について考察が行われているが、日本語などの種類の異なる言語についても、焦点現象がどのような形で顕現するかについて考察が望まれるところである。

以上の若干の問題は残されているものの、本論文は、焦点の重層性仮説が英語にも当てはまり、また CP 領域だけでなく DP 領域においても有効であることを、詳細かつ明晰な議論を通して明らかにした優れた論考であることにかわりない。

2 最終試験

平成 31 年 1 月 24 日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士 (言語学) の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。